

ハーマン・メルヴィルの小説における「男らしさ」からの逸脱

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

学生番号 D122870

氏名 高橋 愛

論文目次

序章

第1章 トンモとは何者か——『タイピー』における男の主体

第2章 身体の傷と男の主体——『ホワイト・ジャケット』における男らしさ

第3章 畏怖される男——『白鯨』におけるエイハブの主体

第4章 クィークェグの不定形の男性像——『白鯨』における男らしさのオルタナティブ

第5章 ピエール・グレンディニングの性——『ピエール』における曖昧なもの

第6章 ケアが揺るがす男らしさ——「ベニト・セレノ」における男のケア

第7章 「平和の使者」と彼を取り巻く男たち——『水夫ビリー・バッド』における「男らしさ」の混乱

終章

引用文献

論文要約

本論文は、19世紀中葉に活躍したアメリカ人作家ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の初期から晩年までの作品を分析することで、彼が作家としてのキャリアを通して、同時代のミドルクラスの白人が信奉していた「男らしさ」の規範からの逸脱をどのように描いているのかを論じたものである。

メルヴィルは、最初期の作品を除けば存命中に評価されることはほとんどなく、生誕から100年を経て再評価された後にアメリカ文学の正典作家と位置づけられ、盛んに論じられるようになった。メルヴィル研究ではメルヴィルとその作品が様々な観点から論じられており、性をめぐる問題もその一つとなっている。特に1980年代に入ってから、ジェンダー研究やクィア批評が隆盛していったことで、セクシュアリティの観点から分析が進められるようになった。それに対し、ジェンダー、特に「男らしさ」をめぐる問題に関しては、アンテベラム期のアメリカ文学という枠組みの中の一例としてメルヴィルが論じられるにとどまっているところがある。本論では、最初期の『タイピー』(Typee, 1846)に始まり、『ホワイト・ジャケット』(White-Jacket, 1850)、『白鯨』(Moby-Dick, 1851)、『ピエール』(Pierre, 1852)、「ベニト・セレノ」(“Benito Cereno,” 1855)、『水夫ビリー・バッド』(Billy Budd, Sailor, 1924)を取り上げ、メルヴィルが同時代の「男らしさ」のイデオロギーに対する抵抗

やそこからの逸脱をどのように描き、作家としてのキャリアを積むなかでどのような変化を見せているのかを示した。『白鯨』までの前期の作品に関する議論では、この時期の作品には逸脱的な身体が描き込まれる傾向が見られること、また、19世紀のアメリカでは正常／標準的な白人の身体が「男らしい」ものにとらえられていたという指摘を踏まえ、傷や欠損のある非標準的な身体に対するメルヴィルの関心から、「男らしさ」の規範からの逸脱について検討した。それに対して『ピエール』以降の作品では欲望などの内面的な問題が探究されるようになってきていることから、後期の作品についての議論では、男の男に対する欲望や関心に焦点を当てている。

本論の序章から第7章の内容の要約を以下に示す。

序章

序章では、まずメルヴィルの生涯とその作品の概要を示した。次に、セクシュアリティやジェンダーの見地からメルヴィルの文学がどのように論じられてきたを概説し、彼の文学には同時代のジェンダー規範（「男らしさ」の理念）に対する抵抗や逸脱が一貫してうかがえるのにもかかわらず、この観点からメルヴィルの文学が通時的に論じられていないということを指摘した。さらに、メルヴィルが作家としてのキャリアを通して逸脱を試みたと考えられる「男らしさ」の理念、すなわち、19世紀中葉のアメリカ北部のミドルクラスの白人の間で浸透していた「男らしさ」の理念について概説した。

第1章 トンモとは何者か——『タイピー』における男の主体

第1長編『タイピー』を語り手であるアメリカ人青年の主体再構築の試みを描いた物語と位置づけ、「トンモ(Tommo)」という語り手の名前と入れ墨という点から、同時代の「男らしさ」のイデオロギーに対するメルヴィルの抵抗について考察した。「トンモ」という語り手の呼称は、西洋の男として主体の輪郭を固定されることへの彼の抵抗を表し、英語名とタイピーの音節を折衷させた名前を受け入れることで、彼は西洋と非西洋を融合させたものとして自らの主体を構築しなおそうとしている。しかし、西洋的な「男らしさ」からの逸脱の試みは、入れ墨という問題に直面したことで頓挫する。欧米人旅行者が残した発言を見ていくと、入れ墨には異なった特性を融合させた主体の構築をおしすすめる力があると言えるが、トンモはこのことに気付くことなく島から脱出する。ただし、オープンエンドな結末を用意することにより、メルヴィルは、身体の変更を介した「男らしさ」からの逸脱にアメリカ人青年の目が開かれる可能性を残している。

第2章 身体の変容と男の主体——『ホワイト・ジャケット』における男らしさ

第5長編『ホワイト・ジャケット』の笞刑をめぐる議論を通して、身体の変更が男の主体にもたらす可能性をメルヴィルがどのように掘り下げていったのかを示した。語り手の青年は白人水兵の「尊厳」を踏みにじるものとして笞刑を糾弾する一方で、「真の尊厳」は笞の傷をものともしないとも語っている。この作品で「真の尊厳」を示す例となっているのは、老水兵アシャント(Ushant)に対する笞刑である。鬚を守るためにあえて背中を傷つけさせるという選択をするアシャントは、市民に認められている身体の変更権を行使し、自らの男らしさを示してみせたいと言える。アシャントの笞刑を通して、メルヴィルは同時代の「男らしさ」のイデオロギーに抵抗し、そこから逸脱するものを提示しているのである。

第3章 畏怖される男——『白鯨』におけるエイハブの主体

19世紀当時の「男らしさ」の理念に対するメルヴィルの抵抗が先鋭化している存在として、第6長編『白鯨』のエイハブ(Ahab)について論じた。エイハブは、身体の変更をきっかけにして生と死、さらに、正気と狂気を股にかける存在となっている。階層によって異なる捕鯨船のジェンダー文化にも目を向けると、彼は前檣側と後檣側の両方のジェンダー文化を股にかけていると考えられる。異なった特性を股にかけるエイハブが持つ圧倒的な力は「なにか」と表現されるが、その力は「アメリカの男」という規範的な主体の枠組みを超越する部分だと考えられる。

第4章 クィークェグの不定形の男性像——『白鯨』における男らしさのオルタナティブ

メルヴィルが特異な身体を介して追求した「男らしさ」のイデオロギーに対するオルタナティブとして、ピークオッド号の鋸打ちのクィークェグ(Queequeg)について論じた。クィークェグは、「南海の男」とみなされているが、その身体には異なった人種的・民族的な特徴が混在している。さらにその言動を子細に眺めていくと、彼にはセクシュアリティの逸脱やジェンダーの越境も見られる。これらの点を踏まえると、クィークェグは、「南海の男」という主体の枠を引き受けているようでいて、その枠組みには収まりきらない存在となっているのである。

第5章 ピエール・グレンディニングの性——『ピエール』における曖昧なもの

第7長編『ピエール』の主人公であるピエール(Pierre)のアイデンティティに影響をおよぼした人物との関係に焦点を当てながら、彼の性を分析している。まず母メアリー(Mary)との擬似姉弟関係において、彼は男のアイデンティティを意識させられながら女の特性も保持させられ、その結果として性的に曖昧な存在になっている。彼はイザベル(Isabel)との関係では異性愛の男になろうとするが、弟という立場もあることで混乱に陥る。最後にいとこのグレン(Glen)との対立関係では、彼らが共有しているグレンディニング(Glendinning)という名前を通して彼の性的な曖昧さの問題が再浮上している。『ピエール』は規範的な「男らしさ」からの逸脱をアメリカ人青年にアメリカの地で引き受けさせようとしたテキストになっていることから、この作品において、同時代の社会の「男らしさ」の理念に対するメルヴィルの抵抗の姿勢がより先鋭化したと言える。

第6章 ケアが揺るがす男らしさ——「ベニト・セレノ」における男のケア

雑誌『パトナムズ・マンスリー・マガジン』(Putnam's Monthly Magazine)に掲載した後、『ピアッツァ物語』(The Piazza Tales, 1856)に収められた「ベニト・セレノ」で示される男による男のケアに注目し、これがセレノ(Cereno)、バボ(Babo)、デラノー(Delano)のそれぞれの男らしさにどのような影響を及ぼしているのかを論じた。まずセレノは、ケアを受けて他者への依存を深めていることから「男らしさ」が損なわれている状態にあると言える。次にケアを行うバボは、黒人に対する人種的偏見とジェンダー化されたケア労働のイメージを逆手にとることで、「男らしさ」と結びつけられる知性を持つという実体を隠蔽している。デラノーについては、彼がスペイン船で見せる浅薄さや鈍感さから、彼の船の名前(Bachelor's Delight)にも用いられる「独身男(bachelor)」という存在に象徴される男としての未熟さを露呈させていると言える。さらに、他者との遭遇を経ても価値観の動揺

を経験しない彼は、規範から逸脱するものの存在を認めようとしないうアメリカ社会のカリカチュアになっている。この作品でメルヴィルは、ミドルクラスの白人が信じていた「男らしさ」の理念の不確定さを示すとともに、同時代のアメリカ社会を諷刺的に批判している。

第7章 「平和の使者」と彼を取り巻く男たち——『水夫ビリー・バッド』における「男らしさ」の混乱

遺作『水夫ビリー・バッド』を取り上げ、性をめぐる言説が変化しつつあった時期に書かれたこの作品において、晩年のメルヴィルが「男らしさ」の理念からの逸脱をどのように描いているのかを分析した。商船人権号ではビリー(Billy)を子とする「幸福な家族」が形成されていたという点から、ビリーは「男らしさ」からの逸脱を船員にうながす存在ととらえられる。次にクラガート(Claggart)に関しては、「生来の墮落」と表現される特性やその容姿から、彼のビリーに対する関心は同性愛的な欲望だと言える。軍艦というホモソーシャルな体制の秩序維持を職務としていることから、彼はビリーに対する特別な関心を

ホモフォービア

同性愛嫌悪で表していると言える。ヴィア(Vere)については、彼はビリーとの関係において、自分の中に発現した女性的なものによる「男らしさ」の動揺を経験したと考えられる。『ビリー・バッド』は、男に対する男の関心が規範的な「男らしさ」と矛盾することなく存立することの困難を示した作品である。ただし、結末に挿入されたバラッドに目を向けると、この作品は、メルヴィルが最晩年を迎えても規範的な「男らしさ」に抵抗を行い、規範から逸脱するような男の性の有り様を言祝ぐものになっていると言える。

以上の議論から、メルヴィルは同時代の北部ミドルクラス社会に浸透していた「男らしさ」の観念に抵抗し続けていたということを明らかにした。ただし彼は、キャリアの進展とともに関心の対象や作風を変化させている。関心の変化という点に関して言えば、前期には身体のような目に見える形で現れているものへの関心を通して、「男らしさ」の理念から逸脱するものが探究されていた。しかし、前期の終盤(『白鯨』)になると、彼は欲望のような人間の内奥に潜むものに関心を示すようになり、同時代の性規範、また、規範から逸脱するものを許容しようとしないう社会に対する批判を強めるようになった。作風の変化は、まず「男らしさ」のイデオロギーに対する抵抗にうかがえる。彼は、前期には直接的な社会批判を行っていたが、後期になるとアイロニーやカリカチュアを用いた暗示的な手法をとるようになっていく。さらに、彼が見せた変化の中でも注目すべきは、逸脱的な男の扱いである。『白鯨』以降の作品において、彼は規範に対するオルタナティブとなる男たちを破滅させている。このことは、先輩作家のナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)との交流などを通してなされた彼の文学者としての成長を示すものだと考えられる。

ハーマン・メルヴィルは、19世紀中葉のアメリカのミドルクラスの白人が理想としていた「男らしさ」の理念に抵抗し、そこから逸脱するものを作品に描き込み続けていたと言える。彼は、男らしさというものを当時の社会で覇権的であった理念から解き放ち、一つではない多様な男らしさを実現しようと奮闘し続けた作家なのである。